

エンカウンター（ENCOUNTER）

第 129 号

平成25年1月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より（8）

第22講 法然上人に学ぶ

かの仏願に順ずるが故に

法然上人がいくら勉強しても悟れない、自分は仏教の教えを実行し得ないことを知り、悩んでおられた時に、善導大師の観經(觀無量壽經)の注釈の中に、一心に専ら弥陀の名を称える、どこへ行っても、何をしていても、いつでも称える、要は称えることをやめなかったらよいのだ、これが極楽へ、永遠の国へ行く「行」である。なぜかと言うと、かの本願、すなわち阿弥陀仏の我名を称うる者を救うという、阿弥陀仏の本願があるからであると。

「一心専念弥陀名号、行住坐臥時節久近を問はず、念々捨てざる者、これを正定の業と名づく、かの仏願に順ずるが故に」(善導観經疏卷四)。特に、最後の「かの仏願に順ずるが故に」という文句が法然の魂の底まで動かしました。これは自分の力ではない、我が名を称える者を救うのだという仏の願の力によるのだ、ということが分かった。それで、善導の教え、恵心の勧めに従って称名念仏に努め、それから恵心の『往生要集』を読んだら、そのことがはっきりしてきた。このように、観經の疏が法然上人を救いました。そうですから、法然上人は、「私はひとえに善導によるのだ」(偏依善導)と言われたのであります。先生をもっている人は幸せです。先生のない信仰はあてになりません。

(P.199)

ロマ書 3 章 21 - 26 節の恵心流注釈

善導大師は、大無量寿経を注釈なさるのに、本文では 36 文字ある仏の本願を 48 文字に訳しました。そして本文には「信じて称うる者は救われる」とあるのを、善導は「信じて」という文字をとってしまって、「称うる者は救われる」と直しました。信仰の客体として見る時に、その客体の中から「信じる」という字を取ってしまった。これが、善導大使が救い主の生まれ変わりだと言われる所以であると思います。

ロマ書 3 章 21 - 26 節に「信仰」という字が名詞で 3 回、動分詞で 1 回、計 4 回出てきます。それが 4 回とも通説では「イエス・キリストを信じる」と、すべて人間側の信仰に訳してあります。私は 22 節の動分子の「信じる者に与えられる」というところだけを人間側の信仰に残して、あとの三つの信仰という名詞全部をキリストの贖罪と訳しました。少し無理があるかも知れないが、文法的にもそう読めます。精神からすれば、これはパウロの精神だと思います。そういうふうに大胆に訳すのは、私が無学であるからでもあります、善導大師によっているからであります。私は自分のキリスト教を「恵心流キリスト教」と言っておりますが、浄土宗の祖師方の精神によると、そう訳さねばならない。信仰の客体の中に人間側の信仰を入れてはならない。こういう通説の訳、人間側の信仰が入って来るような訳が、信仰というものを非常に難しくした理由であります。このような私の解釈は、今は通説になっておりませんが、私の恵心流注釈が、ロマ書 3 章 21 - 26 節の注解の通説になるであろうと信じます。

(P.200)

(注) 善導大師 (613 - 680)

中国浄土教の大成者。動綽に師事し、浄土の行業に勤めた。後、長安に出て、庶民の教化に専念した。彼の観無量寿経の注釈は、観経解釈の決定版と言われている。

一枚起請文について

一枚起請文

もろこしの我が朝にもろもろの智者たちの沙汰し申さるる觀念の念にもあらず、また学問をして念の心を悟りて申す念仏にもあらず、ただ「往生極樂のためには南無阿彌陀仏と申して疑いなく往生するぞ」と思ひとりて申すほかには仔細候はず、但し三心四修と申すことの候ふは皆決定して「南無阿彌陀仏にて往生するぞ」と思ふ中にこもり候なり。このほかに奥深きことを存せば二尊のあはれみにはづれ本願にもれ候べし。念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらに同して、智者の振舞をせずして唯一向に念仏すべし。

証のために両手をもって印す、浄土宗の安心起行この一紙に至極せり、源空が所存この外に全く別義を存せず、滅後の邪義を防がん為に所存を印しおわんぬ。(建歴2年正月23日 源空御判)

これは、私の注釈を待たずとも、よくお読みいただいたら、法然上人が何を言っておられるかが分かると思います。この真ん中頃にあります「但し三心四修と申すことの候ふは南無阿彌陀仏にて往生するぞと思う中にこもり候ふなり」、ここが山であると私は思います。この「三心」というのは、信仰の三つの心でありまして、觀經に「三心を具するものは必ず往生す」という文句がある。至誠心、深心、回向發願心を三心と申すのでありますが、信心、すなわち、信仰のことです。四修とは、長時宗、無間修、恭敬修、無餘修の四つであります。行いのことです。ですから、「信仰も行ないも、みな阿彌陀仏と唱えると往生するぞと思ううちにこもっている」と言うのであります。法然上人の信仰と言うのは、我名を称うる者を救うという救い主の約束を信じることであります。以上が救い主阿彌陀仏のどこをどういうふうに信じるかの説明であります。(P.201)

注 法然上人(源空) (1133-1212)美作(岡山県)の出身、浄土宗の開祖。善導大師の觀經注釈を読み、専修念仏に歸した。著書に「選撰本願念仏集」など。一枚起請文は、法然上人が1212年、亡くなる直前に門弟源智の請いに応じ

て、往生要集の要義を一枚の紙に記した証の文書。

浄土門の仏教とキリスト教との関係

両者のよく似た点について比較してみたいと思います。

(1) 救いの目的がよく似ています。

共に永遠の生命を得ることであります。この世で善行をなすことでもなく、この世において平安な心を得ることでもない。永遠不滅の生命を頂戴する、その結果、善行ができ、心に平安が得られる。これは付いてくるものです。永遠不滅の生命をもらうことが目的であります。これが両方ともよく似ています。

(2) 自分自身を何と信じるかが似ています。

両方とも万人罪人の信仰であります。善導大師は「自身は現に之、罪惡生死の凡夫、曠劫よりこの方常に没し常に流転して出離の縁あることなしと信ぜよ」と言われました。

(3) 信仰の客体が似ています。

両方とも救い主による救いの業の力によっている。一方は、称名するものを救うという本願の力であり、他方はイエス・キリストの贖罪の力であります。

(4) 信仰の内容が似ています。

ただ信じるだけあります。

(5) 救いの実現が似ています。

両方とも、実現は来世です。復活の信仰、来世に置いてキリスト再臨の時、我々は復活するのですが、浄土門も、この世においては、称名しているだけですけれども、死後、阿弥陀仏の国に生まれて後に仏になり、永遠無限の栄光を頂く、という救いの実現がよく似ています。

(6) この世における信仰の続け方が似ています。浄土宗では念仏を称える、救い主の名を称えることですが、ロマ書 10 章 13 節によれば、「主の名を称うる者は救われる」とパウロは言っている。我が主イエスよ、我が主イエスよ」と救い主の名を呼ぶことがよく似ている。但し、キリスト教の神の意思を行なうという献身は、浄土門にはないと思います。

(7) 現世における救いの味わい方が似ています。

浄土門では、念仏すると救い主阿弥陀仏が、自分と一緒におられる。また25菩薩、観世音菩薩、勢至菩薩をつかわして守って下さる。キリスト教の信仰は、この世において健康になるとか、金が儲かるとか、偉い仕事ができる人に褒められるとか、そういうものではない。キリスト自身が、聖霊として我々と共におられる。我々が信・望・愛を持つのは、主が共に在すからであります。これが現世におけるキリスト者の生活の味わい方です。よく似ています。

以上、キリスト教と浄土門の似た点を挙げました。法然上人は「未だ知らず他法の浄土にかかる本願あることを」と言われました。他法の浄土においても、このような救いがあるかも知れないと言われた。あまりによく似ているので、両方の救い主は、同一の人格の方ではないかと思う程であります。

第 23 講 アブラハムの信仰

聖書の鍵は聖霊

50 年前、内村先生は〔ロマ書〕第 4 章に入る前に、講義を 2 回、ロマ書に関係なくお話しになりました。初めの第 21 講「永世不変の道」では、神の言葉、福音というものは永世不変である、我々はこの永世不変の福音を学びつつあるのだ、という話をされました。次の 22 講「神の殿」においては、聖書の鍵は聖霊である、神の霊、真理の御霊が降る時、我々は真に聖書を理解することができる、聖霊が我々に臨まなければ、所詮、我々は真理を理解することができない、ということをお教えになりました。そして、聖霊は神の殿、すなわち、目に見えざる教会に降るのである、我々のこの小さい集まりも、その見えざる教会の一部を構成するものであり、集会ごとにその上に神の霊が降る、という話をされました。先生の集会には 5,600 人は集まっておりましたが、この集まりに対して聖霊が降るのであると、集会の重大性についてお話になったわけであります。

我々のこの小さな高円寺東教会の集まりに対しても、聖霊は降り給う。神は牧師一人を恵むためではなく、集会に対して聖霊を降り給うのです。そのことを信じ、私の講義の初めには、いつも聖霊の降るのを祈るのはこのためであります。

(P.206)

アブラハムの信仰の特色

ここにアブラハムの信仰の特質が述べられています。...アブラハムの年齢はおよそ 100 歳であり、子供を産むのにはほとんど死んだからだと同じ状態でした。その上、年老いた妻、サラは不妊症でした。従って、子供が生まれるはずがない。そういう、いわば死の状態からイサクが生まれたのです。しかし、お前に子を与えるという神の約束を彼は信じていた。神は約束されたことは成就なされると信じた。不可能と見えるのに可能と信じ、希望がないのに希望を持っていた。これがアブラハムの信仰の特質であります。

クリスチャンの信仰の特質も同じであります。我々罪人、死ぬべき者が、永遠不滅の命を与えられるということは不可能であります。それをイエス・キリストの贖いによって与えると神が約束し給うたこと、それを我々は信じるのであります。これをキリスト教の信仰という。キリスト教信仰とは、イエス・キリストが死んだ、この死から神が復活せしめた、これであります。死んだ者が復活するということは不可能であります。この不可能なことを、望みえないことを神が実行し給うた。このように、我々罪人、滅ぶべきものが、イエス・キリストの贖いによって義とせられ、復活する。これがパウロの信仰であり、クリスチャンの信仰であります。パウロのこのイエス・キリストの復活の信仰は、アブラハムの信仰によって裏書きを得た。証明された。この古きアブラハムの信仰によって、パウロは自分の信仰を確かめたのであります。

(P.210)

我は復活しつつあるなり

アブラハム、ダビデ、パウロ、ルッターと、この福音の流れは、この生命は、太い線を引いて人類の歴史の中に流れています。それに比べれば、現代、人類に大きな影響を与えているマルクスの唯物史観も又消え去る日が来るであろうと、私は予言したい。この人類の歴史に流れている福音の太い線は、永遠無限に続くものと、私は確信します。

アブラハムの信仰の特色は、彼の信仰の強さとその信仰の客体にあります。何を信じたかということにある。自分は百歳、サラは不妊、そういう状態で神から子供を授けると言われたら、それを信じた。死から生を信じた。不可能から可能を信じた。

人類の歴史に大いなる事業をなした人々は、この信仰を持った人々です。キリスト教信仰の客体というものは、イエスの死と復活であると共に、我々自身が贖われて復活することであります。これがキリスト教信仰であります。滅ぶべき我々が滅ばない永遠不滅の存在となること、英語で言えば「mortal」な存在が「immortal」な存在になること、これをキリスト教の救いと言います。私達もアブラハムとパウロにならい、イエスの十字架と復活により、不可能と思われる我々の復活を確信せしめられたい。イエスは、「我は復活なり」と仰せになりました。我々も、キリスト再臨の時の復活を確信し、現在「我は復活しつつあるなり」と叫びたい。

アルトハウス先生は、「パウロ程、アブラハムの信仰を深くかつ明らかに理解した人はこの歴史において存在しない」と言われました。また、「ルッター程、この第4章に書かれたアブラハムの信仰を深く解釈した人は教会の歴史に存在しない」と書いておられます。そのルッターは、自分の信仰ならびに福音を、4章16節、20節を引用して説明したと言われています。実にこのロマ書第4章は、信仰を解する鍵として、人類の持っている最も大切なものの一つであると言っても過言ではありません。諸君！このロマ書第4章を熟読玩味しようではありませんか。

第 24 講 義とせらるる事の結果 (1)

患難・忍耐・練達・希望

5 章第 3 節「それだけでなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生み出し、練達は希望を生み出すことを、知っているからである」。いよいよ、3, 4 節は恵みのうちに入っているという、その内容の患難です。患難をも喜んでいる。復活すると患難という希望を患難持って喜んでいるが、今度は実際生活においても患難を喜ぶ。私のように患難にへたばっているような者には、この箇所を説明しても不似合いですから、パウロ先生に来てもらえばよいと思いますが、患難をも喜ぶという。これは普通の人間に及ぶ患難です。特に、信仰を持っているがために受ける患難をもこれに含めて、強調しているとみてよいと思います。

本当にこのキリスト教の希望が、我々のものになった時、患難に打ち克つ力が与えられる。患難は誰でも嫌いです。しかし、「患難がくれば、患難を喜ぶ」とパウロは言う。なぜなら、患難は忍耐を生み出すからと。忍耐というのはこらえている、辛抱しているという意味もありますが、むしろ、勇氣「fortitude」あるいは堅忍

「perseverance」という意味です。耐えているだけではない。復活の希望によって艱難に勝ち得て余りありという意味です。ロマ書 8 章 18 節で「今のこの時の苦しみは、やがて私達に現わされようとする栄光(すなわち、復活)に比べると、いうに足りない」と豪語しました。ですから、忍耐というのは、突き進んで、勇氣を持ってそれに打ち克つ、という意味の字です。...

次に、練達というものは希望を生み出すという。希望というのは復活の希望です。また復活の希望に帰ってきています。キリスト教においては、初めが復活であり、途中が復活であり、最後が復活です。諸君、復活の希望を頂こうではありませんか！ そうすれば、この人生が転換してきます。

(P. 215)

ロマ書の結論 復活の望み

要するに、復活の希望が中心、頂点です。我々は復活するという、これが中心、中心というよりもこれがすべてです。重ねて申し上げます。復活の希望は葬式の時だけに聞くものではありません。毎日、毎時、実行すべき問題です。これを実験して、我々は人生において恐るべきものはなくなる。病気、患難来たらば来たれ、我々に復活の希望あり。主が我々とともに在して、我々はこの人生において恐るべきものはないのであります。パウロの生涯を見て下さい。キリスト教信者とは、あれこれと善行をすることではありません。この復活の希望を持って、進撃して、我々の人生における義務を勇敢に尽くす、その生涯をクリスチャンの生涯と言う。この復活の希望に満たされて、初めて信者の生活は活気を帯びてくるのであります。これは、ロマ書を熟読すれば分かります。ロマ書の最後の結論と言うべき 15 章 13 節には、「どうか、望みの神が、信仰から来るあらゆる喜びと平安とを、あなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように」とあります。「復活の望みを聖霊によってあふれさせてもらえ」と言うのがロマ書全体の結論であります。

(P.217)